

『坑夫』から見た生と死

－ある青年の現実逃避体験－

矢野尊義*
yano@sejong.ac.kr

<目次>

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 序論 | 3.1 生と死後の世界 |
| 2. 生の不安と逃避 | 3.2 生から死へ |
| 2.1 生の不安 | 3.3 死から生へ |
| 2.2 死への逃避 | 4. 逃避からの回帰 |
| 3. 生と死の境 | 5. 結論 |

主題語: 生(life)、死(death)、逃避(escape)、不安(anxiety)、体験(experience)

1. 序論

夏目漱石(1867-1916)は『坑夫』(1908)がある青年の経験談を素材にして書いたものであり、小説らしくない小説であると言った。『坑夫』に対して小宮豊隆は「『坑夫』は筋の殆んどない小説である。纏まりのつかない事実を事実の儘に記す丈である」¹⁾と言い、石嶋淳子も「この小説にはたいして筋らしい筋はない」²⁾と言う。また瀬沼茂樹は「『坑夫』は主人公の性格や筋の展開をおもしろみとする一般の小説とは異なる」³⁾と言い、酒井英行は「『坑夫』論においてしばしば問題にされるのが無性格論と非小説論である」⁴⁾と言ったが、宮井一郎は「『坑夫』の実験的性格は、篇中いたるところに発見することができる」⁵⁾と言い、佐々木雅発も「漱石は作中においても度々語り手の口を借りて坑夫の非小説性を標榜する。彼はある徹底した実験を試みているのだ」⁶⁾と言う。一方、佐藤泰正は「意識の流れという指摘を最

* 世宗大學 國際學部 日語日文學專攻 助教授

1) 夏目漱石(1984)『全集 第三卷 虞美人草 坑夫』岩波書店、p.691

2) 石嶋淳子(1991)「『坑夫』論」浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.216

3) 瀬沼茂樹(1979)『夏目漱石』東京大學出版會、p.133

4) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.96

5) 宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社、p.64

初に提示したウィリアム・ジェームズの影響が大きな影響を与えた。『坑夫』の展開は、その根底たる意識の流れそのものへの着目から生まれた画期的実験的試みであった⁷⁾と言い、浅田隆は「漱石の意図にそっての『坑夫』研究、こういうのが主流を占めていた。それに対して中村氏の意識の流れの指摘というのは、作品の内面に深く入っていくきっかけをつくった⁸⁾と言う。このように「『坑夫』は意識の流れ小説の系譜をなす作品であるとするとなえ方があがあるが、おおかたの見方としては実験小説としての規定が圧倒的であろう⁹⁾と言うことができる。

一方、佐々木雅発は「『坑夫』は小説論そのものではない¹⁰⁾と言い、重松泰雄は「作者は決して主人公の意識の流動を追うことにのみ憂身をやつしているわけではない¹¹⁾と言う。また佐々木充が「重要なのは、意識の流れ小説であるということだけにかかっているのではなく、意識の変貌していく有様であろう¹²⁾と言い、松元寛が「彼が明確な実験的意図からこの方法を取ったということを証明することはできない¹³⁾と言うように「研究されたとしても極端に賛否の両論が起っている¹⁴⁾のが『坑夫』研究の現状であると言える。

『坑夫』の筋ではっきりしているのは、主人公が生不安を感じ、じっとしていられなくなったこと、そしてこの精神的危機状況から逃がれるためにこの世からの逃亡を願うようになること、そんな時、たまたま出会った人を通して坑夫になろうとしたこと、そして坑夫の世界の体験を通して現実に目覚めた主人公が再び日常生活に戻ることであろう。この青年の一連の心理は、現代の若者の心理に類似していると言える。意識過剰な生活をしている人間は、現実感覚が薄く、概して生きる喜びを実感することが少ない。汗を流して働いたり、生きるために苦勞するという体験が乏しいために生きることに虚無感を感じたり、煩わしい人間関係を避けて孤独に生きようとする傾向がある。彼らの中には虚無感から抜け出せない若者も少なくなかろう。『坑夫』の主人公は、このような現代の若者が陥りやすい精神的危機状況を100年以上も前に先取りした例だと言える。

木股知史が「『坑夫』は孤立して放置されていた作品¹⁵⁾だと言い、久保田芳太郎が「『坑夫』

-
- 6) 佐々木雅発(1976)『『坑夫』論-彷徨の意味-』内田道雄・久保田芳太郎編『作品論 夏目漱石』雙文社、p.116
 - 7) 佐藤泰正(1991)『『坑夫』<意識の流れ>の試み-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.222
 - 8) 浅田隆 外(編)(1991)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.279
 - 9) 石嶋淳子(1991)『『坑夫』論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.210
 - 10) 佐々木雅発(1976)『『坑夫』論-彷徨の意味-』内田道雄・久保田芳太郎編『作品論 夏目漱石』雙文社、pp.119-120
 - 11) 重松泰雄(1991)『『坑夫』論 -意図と方法-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.249
 - 12) 佐々木充(1991)『漱石『坑夫』試論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.200
 - 13) 松元寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.76
 - 14) 久保田芳太郎(1994)『漱石-その志向するもの-』三彌井書房、p.123

は漱石の他の小説とくらべてとりあげられて論じられることが少ない作品だ¹⁶⁾と言うように『坑夫』も余り顧られずに置かれてきた」のが事実であり、「まだ『坑夫』は論じ尽されたとはいえない¹⁷⁾」作品であると言える。塚本嘉寿は「『坑夫』などではその悩みの本質があまり的確に捉えられていない¹⁸⁾」と指摘し、酒井英行は「主人公を失踪、自殺願望、坑夫志願に駆り立てた要因は何であったか¹⁹⁾」と問うている。浅田隆が「意識の流れというあたりでいつまでもそこにこだわるのではなくて違った形での読みをしてもいい²⁰⁾」と言うように『坑夫』の研究を意識の流れ論や非小説論や実験論や無性格論にのみ留める必要はなかろう。漱石は「『坑夫』にひとりの青年の自己回復、回心の契機を語らんとした²¹⁾」とも言え、「『坑夫』は漱石自身の問題にかかわる切実な成因を持った作品²²⁾」であることは言うまでもない。

このように『坑夫』は今までその話の内容自体に対しては論じられることが少なく、内容の解釈が難しい作品であった。先に述べたように話の筋は単純ではあるが、ところどころに魂が肉体から分離する心霊現象が描かれており、これら心霊現象を含んだ一貫した話の内容の把握が困難だからである。本稿はこのような『坑夫』に対して青年が体験した生と死の状況を逃避と回帰の観点から新たに分析し、作品を解釈することで『坑夫』に現れた矛盾の原因を明らかにする。

2. 生の不安と逃避

現代社会における人間は衣食住をはじめとする外的生活に対する心配は減少したとしても精神的不安はむしろ増大したと言える。現代社会の人間は実存的生の不安に苛まれるようになったからである²³⁾。『坑夫』における主人公は、今から百年以上も前に精神的不安に

15) 浅田隆 外(編)(1991)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.280

16) 久保田芳太郎(1994)『漱石-その志向するもの-』三彌井書房、p.123

17) 佐々木充(1991)「漱石『坑夫』試論」浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.198、p.197

18) 塚本嘉寿(1994)『漱石、もう一つの宇宙』新曜社、p.22

19) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.99、p.110

20) 浅田隆 外(編)(1991)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.281

21) 佐藤泰正(1991)『『坑夫』-<意識の流れ>の試み-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.232

22) 重松泰雄(1991)『『坑夫』論 -意圖と方法-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.244

23) 現代の若者たちが程度の差はあれ、誰もが心の深い部分で感じている気持ちには不安、焦燥感、空虚感や無意味感、そこから生じる無気力、無力感がある。他人に心から交わることもできず、孤独にも耐えきれず、自分自身の欲求や感情もいきいきとは湧いてこず、自分という実感もあいまいであったりする。生きていることの重圧が苦しくて死を願うことさえ出てくる。(文教大学臨床心理学

苦しみ、その不安から逃れるために死を考えているが、これは生の不安から逃れるために容易な道を模索しやすい現代の若者と類似していると言える。

2.1 生の不安

酒井英行は『坑夫』の主人公に対して「関係と相対性の座標からずれ落ちた彼は、見せ掛けの自己が崩れ、自分がもはや何者でもない存在に転落していることを潜在的に感じているのだ。こうした主人公の心理状態が彼を包む不安である」²⁴⁾と言い、石嶋淳子は「家出をして彷徨する一青年という設定は、自己というものがつかめない不安定な一人の人間を造りあげている」²⁵⁾と言う。酒井は主人公の不安を対人関係の崩れから生じたものであるとし、石嶋は自己の人格が確立していないところから不安が生じるとしている。いずれも不安を青年特有の自我形成における問題として捉えていると言える。主人公の不安は次の如く描かれている。

一旦飛び出したからは、もうどうあつても家へ戻るし簡はない。東京にさへ居り切れない身体だ。(中略) 休むと後から追っ掛けられる。(中略) だから只歩くのである。(中略) ああ、詰らない。歩くのは居たたまれないから歩くので、此のぼんやりした前途を抜け出す為に歩くのではない。抜け出さうとしたつて抜け出せないのは知れ切つてゐる。(中略) 何の為に歩いて居るんだか分らなくつて、しかも歩かなくつては一刻も生きて居られない程の苦痛は滅多にない。(中略) のみならず歩けば歩く程到底抜ける事の出来ない曇つた世界の中へ段々深く潜り込んで行く様な気がする。

(坑夫 437-438)

主人公は家を「飛び出し」て「もう家へ戻るし簡はない」と言う。「後から追っ掛けられる」から「只歩く」までだと言う。彼が家出した理由については書かれていないが、彼が「ぼんやりした前途を」「抜け出さうとしたつて抜け出せない」と独白しているのを見ると、彼は今の状況から抜け出したいのであり、それが家を基盤とした彼の「前途」と関連していることがわかる。これは自我に目覚めた青年が家から「抜け出」そうとする不安定な心理を表わしているとも言える。しかし、「居たたまれない」とか、「一刻も生きて居られない」という言葉から主人公が尋常ならぬ不安に襲われていることが見て取れる。

科編集委員会(編)(2004)『人間科学としての臨床心理学』金剛出版、pp.4-5)

24) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.100

25) 石嶋淳子(1991)『『坑夫』論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.212

留まつた片足を不安の念に駆られて一步前へ出すと、一步不安の中へ踏み込んだ訳になる。不安に追い懸けられ、不安に引つ張られて、己を得ず動いては、いくら歩いてもいくら歩いても埒が明く筈がない。生涯片付ない不安の中を歩いて行くんだ。(中略)どこ迄も片付かぬ不安が立てこめて居る。是では生甲斐がない、去ればと云つて死に切れない。何でも人の居ない所へ行つて、たつた一人で住んで居たい。それが出来なければ一層の事…。(坑夫 438-439)

ここで「人の居ない所へ行つて、たつた一人で住んで居たい」というのは他人との関係を煩わしく思い、人間関係から逃れたい心境を表わしている。上記の「追つ掛けられる」とは家族に追われることを意味していたが、ここでは「不安に追い懸けられ、不安に引つ張られて」逃げていることが明かされている。ここで主人公が「抜け出」したいのは家の拘束以上に自分の心の中にある「片付ない不安」であることがわかる。故に「一刻も生きて居られない程の」「居たたまれない」ような苦痛とは、独立心に芽生えた青年が家を「抜け出」そうとして生まれたものというよりも彼の心の中にある「片付ない不安」から来ていると言うことができる。「只歩く」のも家を「飛び出した」のもわけもわからず自分に迫ってくる「不安の念に駆られて」なしたことであると言えよう。

重松泰雄は『『坑夫』の主人公の『片付ない不安』の描写に漱石自身の不安を連想する。『坑夫』の主人公とは存りし日の作者自身の姿とも言えなくはない²⁶⁾と言ひ、佐藤泰正も『『片付かぬ不安』『半陰半晴の姿』という言葉には、作者自身の青春彷徨の影がひめられてはいないか²⁷⁾と言ふ。いずれも主人公の不安が漱石自身の不安であることを指摘しているが、この「不安」は主人公が家出をしたという体験談に対して漱石が書き加えたものであると言うことができる。

2.2 死への逃避

瀬沼茂樹は『『坑夫』の主人公も孤独な生と無力とを味った。みずから死場所をもとめて生の彷徨をするほど主人公には実存的意味をもっている²⁸⁾と言ふ。

26) 重松泰雄(1991)『『坑夫』論 -意圖と方法-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.244

27) 佐藤泰正(1986)『夏目漱石論』筑摩書房、p.141

28) 瀬沼茂樹(1979)『夏目漱石』東京大學出版會、p.139

其の當時はただ暗い所へ出ればいい。何でも暗い所へ行かなければならないと、只管暗い所を目的に歩き出した許である。(中略)ある場合になると吾々は死を目的にして進むのを責めても慰藉と心得る様になつて来る。(坑夫 440)事の起りを調べて見ると、中心には一人の少女がある。さうして其少女の傍に又一人の少女がある。(中略)第一の少女の傍に居たら、此の先どうなるか分らない、ことに困ると實際弁解の出来ない様な怪しからん事が出来るかも知れないと考へ出した。がどうしても離れる事が出来ない。しかも第二の少女に対しては気の毒である、済まん事になつたと云ふ念が日々烈しくなる。(坑夫 464-465)

久保田芳太郎は主人公が「婚約が決まっている少女(艶子)とたがいに思慕しあっている少女(澄子)との間にはさまってしまい、死を志向した逃亡であった」としながらも「死のうとした理由も薄弱であった」²⁹⁾と指摘する。しかし、主人公が死を願う動機が三角関係であったかどうかは明白だとは言えない。主人公の不安が三角関係から生まれているという根拠はないからである。三角関係が生んだものは、片方の少女に対する「気の毒」だという同情の思いや「済まん事になつた」という陳謝や後悔の念であった。故にここでは三角関係があたかもこの不安の「事の起り」でもあるかのように記されてはいるが、不安と三角関係は必ずしも因果関係を成しているとは言えないことがわかる。ゆえに「生涯片付かない不安」とは三角関係のような外部から生まれた問題ではなく、自分自身が抱えている自己内部の問題から来ていると言える。「ぼんやりした前途」とか、この状況から「抜け出せない」とは自分(self)の心が問題になっているのであって、主人公は自我(personality)の危機のために不安を感じ、「一刻も生きて居られない」のだと言うことができる。

自分が鏡の前に立ちながら、鏡に写る自分の影を気にしたつて、どうなるもんぢやない。世間の掟といふ鏡が容易に動かせないとなると、自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である。(中略)そこで自分は此の入り組んだ関係の中から、自分丈をふいと煙にして仕舞はうと決心した。然し本当に煙にするには自殺するより外に致し方がない。そこで度々自殺をしかけて見た。所が仕掛けたんぴにどきんとして已めて仕舞つた。(中略)自殺が急に出来なければ自滅するのが好からうとなつた。然し(中略)生家に居ては自滅しやうがない。どうしても逃亡が必要である。(中略)逃亡に見ても矢張り過去に追はれて苦しい様なら、其の時徐に自滅の計を廻らしても遅くはない。それでも駄目と極まれば其時こそきつ度自殺して見せる。

(坑夫 466)

29) 久保田芳太郎(1994)『漱石-その志向するもの-』三彌井書房、pp.128-129

酒井英行は『『自分の方で鏡の前を立ち去るのが何よりの上分別である』と考えて出奔する。主人公は自我の崩壊が鏡に映し出されることを怖れて逃亡を企てた³⁰⁾と言う。しかし、ここで主人公が「鏡の前を立ち去ろうとしたのは「世間の掟といふ鏡が容易に動かさない」ためであり、鏡に「自分の影」が写ることを恐れたからではない。では、「鏡に写る自分の影」とは何か。まず「自分の影」とは鏡に映った本当の自分の心の姿のことであり、この本当の自分はいくら世間に合わせて生きようとしてもその「影」が鏡に写ってしまうということであろう。自分を偽って生きようとしても自分の本性が「世間といふ鏡」に写ってしまうということである。故に「自分の影」は「世間の掟」と一致しない自分の姿を見せており、自分の心はいつも葛藤状態にあるという意味であろう。これは世間を恐れるというよりも世間に対する失望やあきらめを意味している。故にそれによる主人公の無力感や無気力、そして何よりも虚無感を表わしていると言える。

『坑夫』の執筆にあたって漱石はある青年の体験談を基にした。そのため漱石は実話(fiction)を書いたとして『坑夫』については小説の創作性に関する論議がなされやすかった。それが今まで『坑夫』研究で論じられてきた実験小説論や非小説論、無性格論や意識の流れ論であったことは言うまでもない。しかし、主人公が抗道に入るようになったいきさつがあたかも生の不安と三角関係にあるかのように冒頭で語られているが、両者は正確には因果関係を有しないと言える。殊に三角関係が主人公の死への願望や逃亡の原因であったと言うにはあまりに簡単に語られており、記述が不十分である。一方、生の不安は死や逃亡の原因になりうるが、これが後の抗道の中での話やその後の筋の展開と内容が一致するかどうかは不明である。いずれにしても主人公の不安と三角関係は相互に因果関係があるとは言えず、したがってこれは筆者が故意に結び付けたものだと言え、筆者の創作であると言えることができる。

3. 生と死の境

松元寛は「<自分>は作者の分身的存在でもある。青年の語った彼の坑夫体験とでも言うべきものが、異常と言ってよい程強く漱石の心を捉えた³¹⁾」と言い、佐々木充は「主人公の意識は現在に固着していてその瞬間瞬間の自己を語り続ける。これは漱石の構造意識の産

30) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.99

31) 松元寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.79

物であり、漱石は素材の事実を変更するのではなく、その内的実質を変化させている。死を心の何処かに思いつつ、無意識に歩いている青年が語るものは、彼自身の無意識閥への旅路なのであった」³²⁾と言う。松元も佐々木も主人公は作者漱石の心を代身していると言う。漱石は主人公の口を通して彼自身の心の世界を露にし、自らを対象視していると言える。小宮豊隆は「漱石はここで坑夫の一々の言語動作に対してフロイドの精神分析のようなものを試みようとする」³³⁾と言っているが、自分が自分の心理を描写してそれを自ら鑑賞していると言える。

3.1 生と死

主人公は自分の心がこの世を生きていることを事実として実感できないでいることを告白している。

自身の魂がおやと思つて、本気に此の外界に対し出したが最後、いくら明かでも、いくら暢びりしてみても、全く実世界の事実となつて仕舞ふ。実世界の事実となると如何な御光でも難有味が薄くなる。仕合せな事に、自分は自分の魂が、ある特殊の状態に居た為明かな外界を明かなりと感受する程の能力は持ちながら、是は実感であると自覚する程作用が鋭くなかつた為—此の真直な道、此の真直な軒を、事実等に等しい明かな夢と見たのである。此の世でなければ見る事の出来ない明瞭な程度と、これに伴ふ爽涼した快感を以て、他界の幻影に接したと同様の心持になつたのである。

(坑夫 485)

酒井英行は「自我の崩壊によって自己と外界との関係も崩れてしまう。外界がにわ實かに意味性を失い、見慣れぬ世界として主人公のまなかに立ち現われる。現実と非現実を識別する遠近法を失いかげ、現実の現実性が極度に希薄になった状況を『事実等に等しい明かな夢を見たのである』と表白している」³⁴⁾と言う。しかし、ここでは「自身の魂」と「此の世」との関係について述べたのであってその関係に対する認識の違いが自我の崩壊によるものであるとは言えない。主人公は「自身の魂」が「此の世」に対した時、「外界」が「事実」としての「実世界」になることを危惧している。幸にも彼の魂が「特殊の状態に居た為」に「此の世」を「事実」として「実感」できず、「夢」と見做した。そのため、現実には逆に「他界の幻影」の如く

32) 佐々木充(1991)「漱石『坑夫』試論」浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.199

33) 小宮豊隆(1993)『夏目漱石(下)』岩波書店、p.13

34) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.100

感じたというのである。すなわち、ここで「自分の魂」と「此の世」の関係は「実世界」に対する「事実」の認識の問題として述べられている。本来、魂は「此の世」のものではないために「此の世」で「事実」として認められるべきものではない。ここで魂はそのことを知っているため、「此の世」という「外界」を「夢と見」なし、「此の世」を「事実」として「実感」することを拒否した。それ故、自分は「此の世」に対して「他界の幻影に接したと同様の心持になった」と言うのである。これは自分の「魂」が「此の世」を「他界」の如く感じているというわけで、この世を事実と見做し、あの世を「実世界」ではない「他界」と見なしている一般の人とは反対の認識の仕方をしていることがわかる。

また久保田芳太郎は「主人公の意識は、若い男の事実らしい意識と作者の意識との二重構造の上から成立している」³⁵⁾と言う。しかし、漱石が話者の話を聞いてそのまま主人公の心の内を書いたにしては、あまりに心の描写が詳細であり、かつ高尚である。果して話者なる青年が魂に対してこれほどの深い認識を持っていたであろうか。この文章は作者漱石が追加したものであり、これら「自身の魂」と「此の世」との関係についての記述は漱石の考えであるということもできよう。

眼が覺めて、夜が明けて、世の中が土臺から陰と陽に引ッ繰り返つてのを見るや否や、眼をあいて涎を垂れて、横になつた塙、ちつとしてゐた。自覺があつて死んでたらこんなだろう。生きてるけれども動く氣にならなかつた。昨夜の事は一から十迄よく覚えてゐる。然し昨夜の一から十迄が自然と延びて今日迄持ち越したとは受け取れない。自分の経験は凡てが新しくつて、かつ痛切であるが、其新しい痛切の事々物々が何だか遠方にある。遠方にあると云ふよりも、昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て、截然と區別がついた様だ。太陽が出ると引き込む丈の差で、かう心に連続がなくなつては不思議な位自分で自分が当にならなくなる。要するに人世は夢の様なものだ。(坑夫 523)

ここでは「死んでたらこんなだろう」ということが書かれている。これも漱石の持論であるらしい。「眼が覺めて」みたら「眼をあいて涎を垂れて、横になつた」自分の体があったと言う。そして不思議なことに「昨夜」までの記憶が「何だか遠方にある」というのである。「昨夜と今日の間に厚い仕切りが出来て」「區別がついた」というのは、この間に自分が死んだことを意味している。すなわち、眼が覺めたのはこの世ではなく、あの世であつたために「心に連続がなくなつて」いて過去の記憶が何だか遠い世界のことのようと思われるのである。

35) 久保田芳太郎(1994)『漱石-その志向するもの-』三彌井書房、p.127

瞬間にして「世の中が引ッ繰り返つて」しまったように感じ、それは「太陽が出ると引き込む丈の差」と言う。これはあまりにも大きい変化が起つたことを意味している。自分でそれが認識できず、理解することができないから「自分で自分が当にならなくなる」と言っている。もはや自分が何者であるかすらわからなくなったというのである。それが死というものであり、死後なるあちら側の世界から見ると「人世は夢の様なもんだ」というわけであろう。このようにここでは死後の世界について語られている。

3.2 生から死へ

『坑夫』の主人公の心は生と死の間を彷徨するが、この心の迷いは坑道の坑の中を舞台にして象徴的に描かれている。主人公はまず死へと向かおうとする。

坑は暗い、命は惜しい、頭は乱れてゐる。生きてるか死んでるか判然しない。(坑夫 616)ただ其の儘の姿勢で向ふの壁を見詰めてゐた。身体が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、雙方相ひ合つて、生死の間に彷徨してゐたと見えて、しばらくは万事が不明瞭であつた。始めは、どうか一尺立方でもいいから、明かるい空気が吸つて見たい様な気がしたが、段々心が昏くなる。と坑のなかの暗いのも忘れて仕舞ふ。どつちがどつちだか分らなくなつて朦朧のうちに稠和して來た。然し決して寝たんぢやない。しんとして、意識が希薄になつた迄である。(坑夫 625)

暗い坑道は現実の坑道であると共に生死を繋ぐ道として地上と地獄の境を表わしている。「生死の間に彷徨してゐた」とは、地上に出ることができず、地獄のような暗い坑道をさ迷うことを意味する。酒井英行は「主人公は次々と目前に押し寄せてくる周囲の事情に対してただ受動的な役回りを演じているだけであり、自己を運命に操られる操り人形のように眺めている」³⁶⁾と言い、佐々木雅彦は「『坑夫』に底流するものは、己を奪われていることの苦い喪失感」³⁷⁾だと言う。いずれも主体性なく、なされるがままにいる主人公の自我の弱さを指摘している³⁸⁾。しかし、ここで語っているのは生死が「判然しない」状態となつた経

36) 酒井英行(1991)『『坑夫』論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.234

37) 佐々木雅彦(1976)『『坑夫』論-彷徨の意味-』内田道雄・久保田芳太郎編『作品論 夏目漱石』雙文社、pp.119-120

38) 自分以外の外部の対象に依存し、自分を支えるものを自分の内部に見出すことができない。受動的な人間は自己に出会うことなく、心の底に不安や無力感を感じがちである(文教大学臨床心理学科編集委員会(編)(2004)『人間科学としての臨床心理学』金剛出版、p.5)

験であり、それを主人公は「意識が希薄になった」ために「生死の間に彷徨してゐた」のだと認識している。

自分は口惜くなつた。何故こんな猿の真似をする様に零落たのかと思つた。倒れさうになる身体を、出来る丈前の方にのめらして、梯子に倚れる丈椅れて考へた。(中略)足の底へ清水が沁み込むのも、全く気が附かなかつた。従つて何分過つたのか頓と感じに乗らない。すると又熱い涙が出て来た。心が存外慥かであるのに、眼丈が霞んでくる。いくら瞬をしても駄目だ。湯の中に眸を漬けてる様だ。くしやくしやする。焦心たくなる。癪が起る。奮興の度が烈しくなる。身体は思ふ様に利かない。自分は齒を食ひ締つて、両手で握つた段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。一層の事、手を離しちまはうかしらん。(中略)とむらむらと死ぬ気が起つた。

(坑夫 630)

無抵抗で無気力だった主人公は「足の底へ清水が沁み込む」のを感じて初めて「口惜くなつた」と言う。なぜ自分がこういう羽目になってしまったのか、今になって不合理に思つたというのである。「すると熱い涙が出て来た」。実感が湧いたからである。自分が生きていたことも自分が今、危機に瀕していることも今になって自覚したというわけであろう。この自分が生きているという実感は瞬間ではあれ、彼にとって喜びであつたはずである。しかし、主人公はその次の瞬間、なぜか「死ぬ気が起つた」と言う。

から心に落ち附き有る。刺激が少い。さう云ふ状態で壁へ椅子かかつてゐると、其の状態がなだらかに進行するから、自然の勢ひとして段々気が遠くなる。魂が沈んで行く。かう云ふ場合に於ける精神運動の方向は、いつも極まつたもので、必ず積極から出立して次第に消極に近づく経路を取るのが普通である。所が其の普通の経路を行き尽くして、もう是れがどん詰だと云ふ間際になると、魂が割れて二様の所作をする。第一は順風に帆を上げる勢ひで、此どん底迄流れ込んで仕舞ふ。すると夫限死ぬ。

(坑夫 631)

主人公は自分が生きていたことを実感し、自分の生命が危うい状況に置かれていることを自覚したにもかかわらず、「壁へ椅子かかつてゐると」「段々気が遠くなる」。そして「魂が沈んで行く」のを感じる。「どん底迄流れ込んで仕舞」おうとする「勢ひ」に身を任せてしまうためである。「どん詰だと云ふ間際になると」意外にもそのような死に向かうとする力がどこからともなく働くことを明かしている。

3.3 死から生へ

しかし、次に主人公の心は死への志向から生への希求へと逆転する。

もし駆落が自滅の第一着なら、此の境界は自滅の第一着か知らないが、兎に角終局地を去る事遠からざる停車場である。(中略)正気を失はないものが、嬉しいと云ふ自覚だけを取り落す訳がない。自分の精神状態は活動の区域を狭められた片輪の心的現象とは違ふ。(中略)所が段々と競り卸して来て、愈零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した。こいつは死ぬぞと云ふ考へが躍り出した。すぐに続いて、死んぢや大変だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、豁と眼を開いた。(坑夫 626)

しかし、死に向かつて「段々と競り卸して来て、愈零に近くなつた時」、今度は反対に「死んぢや大変だ」と思ったと言う。突然、そういう「考へが躍り出した」と言うのである。これは意識的なものではなく、無意識的なものであると言えよう。意識的には死のうとしたが、無意識的に生きようとしたというわけであろう。

足の先が切れさうである。膝から腰迄が血が通つて氷りついてゐる。腹は水でも詰めた様である。胸から上は人間らしい。眼を開けた時に、眼を開けない前の事を思ふと「死ぬぞ、死んぢや大変だ」迄が順々につながつて来て、そこで、ぷつりと切れてゐる。切れた次ぎは、すぐ眼を開いた所作になる。つまり「死ぬぞ」で命の方向転換をやつて、やつてからの第一所作が眼を開いた訳になるから、二つのものは全く離れてゐる。続いてゐる証拠には、眼を開いて、身の周囲を見た時に、「死ぬぞ…」と云ふ声が、まだ耳に残つてゐた。慥かに残つてゐた。

(坑夫 627-628)

体が腹まで水に浸り、もはや死んだかのような冷たい状態になった時に「死ぬぞ」という声がどこからともなく聞こえてきたと言う。主人公はこの言葉を聞いて次の瞬間に我に帰った。反射的に死んではいけないと思って「眼を開い」たからである。この反射行動としての覚醒により彼は死なずに済んだわけである。このようにここでは抗道を舞台として生と死の境が描かれている。漱石が青年の手書きから最も関心を持って借用したのも漱石が体験したことのない坑道の中でのこの部分であると言える。

4. 逃避からの回帰

酒井英行は「彼が虚栄心を剥落させていくことは、無性格を認識していくことと並走関係にあり、それが『坑夫』の主軸である。山越えの体験によって簡単に昔の自己に戻っていた」³⁹⁾と言うが、北垣隆一は「『坑夫』は主人公がはっきりした理由もなく、本当に世の中がいやになり、すべてをすてて逃避する心境にある。『坑夫』は人のある断面における心理を追究しようとするところみであった」⁴⁰⁾と言う。

実際に「死ぬぞ...」と注意して呉れた人間があつたとしきや受け取れなかつた。けれども、人間は無論みる筈はなし。と云つて、神一神は大嫌だ。矢つ張り自分が自分の心に、あわてて思ふ浮べた迄であらうが、夫程人間が死ぬのを苦に病んでゐやうとは夢にも思ひ浮べなかつた。これだから自殺は出来ない筈である。かう云ふ時は、魂の段取が平生と違ふから、自分で自分の本能に支配されながら、丸で自覚しないものだ。気を附けべき事と思ふ。此の例なども、解釈のしやうでは、神が助けて呉れたともなる。自分の影身に付き添つてゐる(中略)さう云ふ人々の魂が救つたんだともなる。(坑夫 628)

主人公は何が自分の自殺を食い止めたのか、自問している。人間か、神か、人々の魂か、それとも自分の本能か。いずれにしても彼には自分の取った行動に対する「自覚」がない。そうだとすれば生きようとする本能のためであつたとも言えようが、「神が助けて呉れた」とも「人々の魂が救つた」とも言えよう。いずれにしても主人公はいつのまにか死のうとしたことを忘れ、もはや生きることのみを考えていることがわかる。

仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中迄続いてゐる。是非共登らなければならない。もし途中で挫折すれば犬死になる。暗い坑で誰も人のみない所で、日の目も見ないで鉦と同じ様ところば落ちて、それつきり忘れられるのは(中略)無念である。是非共登り切つちまはなければならない。カンテラは燃えてゐる。梯子は続いてゐる。梯子の先には坑が続いてゐる。坑の先には太陽が照り渡つてゐる。広い野がある、高い山がある。(中略)どうあつても登らなければならない。(坑夫 633)眼が眩む。眼を閉つて登る。燈も見えない、壁も見えない。ただ暗い。手と足が動いてゐる。動く手も動く足も見えない。手障足障丈で生きて行く。生きて登つて行く。生きるると云ふのは登る事で、登ると云ふのは生きる事であつた。(坑夫 634)

39) 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.111

40) 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.40

この段階になって彼は「坑の先に太陽が照り渡つてゐる」のを見た。地上の光である。彼は梯子を登れば、この世に帰ることができるのである。彼は我知らず、希望を感じた。「生きられる」と思ったからである。そう思うやいなや彼はひたすら梯子を登って行つた。今まで死のうと思っていたことさえ忘れ、必死で坑の先へ先へと向かつて一目散に登って行つたのである。

安さん丈は暗い穴の底ながら、十分自分の人格を認めて呉れた。安さんは(中略)墮落の底に死んで生きてるんだと云つた。それ程墮落したと自覚してゐながら、生きて働いてゐる。生きてかかん蔽いてゐる。生きて-自分を救ふとしてゐる。安さんが生きてる以上は自分も死んではならない。死ぬのは弱い。

(坑夫 651)

坑道の出口近くまで辿り着いた主人公は、ここで一人の坑夫である安さんに出会つたが、彼は安さんの人格に感動し、何より安さんが自分を理解してくれたことに喜びを感じた。主人公はこんな所で予期せぬ人を通して人間の暖かさを知り、人間を信頼する気持ちを取り戻したのである。

家が恋しくなつた。父よりも母よりも、艶子さんよりも澄江さんよりも、家の六畳の間が恋しくなつた。(中略)艶子さんは起きてる。さうして泣いているだろう。甚だ気の毒だ。(中略)死んでもいい、生きてもいい。華厳の瀑杯へ行くのは面倒になつた。東京へ帰る? 何の必要があつて帰る。どうせ二三度咳をせくうちの命だ。(坑夫 662-670)仕舞には金さんの様に平たくなつて、飯場の片隅に寝るだろう。さうして死ぬだらう。自分は火のない囲爐裏の傍に坐つて、夜明迄考へつづけてゐた。その考へはあとから、あとから、仕切なしに出て来たが、何れも干枯びてゐた。涙も、情も、色も香もなかつた。怖い事も、恐ろしい事も、未練も、心残りもなかつた。(中略)自分は此の帳附を五箇月間無事に勤めた。さうして東京へ帰つた。

(坑夫 672-674)

こうして主人公は、自分がなぜここに来たのかも忘れて坑道の梯子を登りきり、ついに自力で外に出た。そして家に帰ろうとする。彼の逃亡はこうして終わった。佐々木充は「『坑夫』は一種さまよえる人の自己の眞実発見のものがたり、おのれの本体を求める主人公の姿を描く作品」⁴¹⁾であると言い、瀬沼茂樹は「死の決意から再生する心理的契機をつかむきびしい精神的状況を示唆する方に作品の重点があつた」⁴²⁾と言う。主人公を死の誘惑から

41) 佐々木充(1991)『漱石『坑夫』試論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三巻』桜楓社、p.207

現実に連れ戻したものは、彼の後悔や反省ではなく、坑内の洞窟で腹まで浸った冷たい水であり、背筋を伸ばして寝ることもできない窮屈な飯場の片隅であり、安さんという一人の坑夫の暖かさであった。主人公は辛い現実を皮膚で体験することにより、我に帰ることができたのである。坑道がどんなに冷たく苦しい世界か、坑夫がどんなに辛く、惨めな仕事であるかを初めて体感し、自分の家の自分の部屋がどんなに幸福な世界であるかを知ったのである。

このように坑道の中での主人公の死から生への志向の転回は「生の不安」との関係から説明できるものではない。生きることに生きがいを感じず、無気力な状態にあった主人公はこの世からの逃亡の手段としてまず坑夫になろうとするが、坑夫のつらさを体で体験し、実感することで現実に返ることができたというあらすじである。ゆえに青年を死への願望や坑道の中に導いたものは生に対する虚無感であり、彼を現実に返したものは洞窟の水の冷たさや寝る場所のない者のつらさや人間の暖かさであったと言える。すなわち、彼を現実から逃避させたものは苦勞のない無気力な生活から来る虚無感であり、彼を現実に戻したものは彼が初めて経験した肉体的苦勞であった。故に冒頭の「生の不安」や三角関係は主人公の現実逃避の原因であるとは言えず、漱石が書き加えた創作であったとすることができる。

5. 結 論

以上見てきたように『坑夫』の中心部分は、主人公が坑道に入ってから坑道を出るまでの部分であると言える。漱石が青年の体験談を最も関心を持って借用したのもこの部分であると言える。この坑道の中の体験から見る限り、主人公が坑道を出ることを決意するようになったのは、皮膚や体で現実のつらさを知ったからである。彼は働くことのつらさや生きることのつらさを体感することで現実に目覚めた。そしてそれまでの日常生活が如何に楽で幸せなものであったかを知った。このことから主人公を坑道に導いたものは生きることに対する無感覚、すなわち虚無感だったとすることができる。青年は生きる喜びがないがために死を願い、より死の世界に近い地下の坑道に入ることを欲したのである。しかし、彼は坑道の洞窟の中で冷たい水に腹まで浸かり、死に臨むような体験をすることで現

42) 瀬沼茂樹(1979)『夏目漱石』東京大学出版會、p.137

実に目覚めたのである。自分が生きていることを実感したからである。彼はこうして虚無感から脱した。そして無気力状態から日常感覚へと戻ることができたのである。

結局、冒頭に書かれた「不安」は、抗道体験の直接的原因ではないと言え、不安から死を願ひ、そのため坑夫の道を選んだという話の筋は、その後の抗道を出るという結末とも矛盾すると言える。主人公の「不安」は抗道に入るやいなや消えており、抗道を出るに際しても何ら振り返られることがない。もし「不安」のために抗道に入ったのであれば、抗道を出るのも「不安」との関係によるはずだが、主人公が抗道に入るやいなや不安の問題はもはやなくなる。このことは冒頭の生の「不安」に対する記述が漱石の創作であったことを明かしている。したがって抗道体験への導入としてのこの「不安」についての記述は漱石が故意に書き加えたものであり、それは当時の漱石の精神状態を書いたものであったと言えることができる。しかし、それは作品をより興味深く意味のあるものにはしたが、全体の筋としては矛盾を孕んだものにした。尋常ならぬ生の不安は漱石のものであり、抗道での体験により虚無感から心を回復させたというのは青年の実話であろう。このように『坑夫』は実話と創作が混合しているため、全体の筋の把握が困難であり、その評価もさまざまであった。今回の作品分析により冒頭部分の「不安」を中心とする話の導入部分が漱石自身を描いたものであり、その後が青年の実話に基づくものであるということを明白にすることで『坑夫』の筋とその内容がより明確になった。

【参考文献】

- 石嶋淳子(1991)『『坑夫』論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.212
 酒井英行(1991)『『坑夫』論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.234
 佐藤泰正(1991)『『坑夫』-意識の流れ-の試み』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.222
 佐々木充(1991)『漱石『坑夫』試論』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.207
 佐々木雅發(1976)『『坑夫』論-彷徨の意味-』内田道雄・久保田芳太郎編『作品論 夏目漱石』雙文社、pp.119-120
 重松泰雄(1991)『『坑夫』論 -意圖と方法-』浅田隆 外(編)『漱石作品論集成 第三卷』桜楓社、p.244
 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.40
 久保田芳太郎(1994)『漱石-その志向するもの-』三彌井書房、p.127
 小宮豊隆(1993)『夏目漱石(下)』岩波書店、p.13
 酒井英行(1990)『漱石 その陰えん』有精堂、p.111
 佐藤泰正(1986)『夏目漱石論』筑摩書房、p.141
 瀬沼茂樹(1979)『夏目漱石』東京大學出版會、p.137
 塚本嘉寿(1994)『漱石、もう一つの宇宙』新曜社、p.22
 夏目漱石(1984)『全集 第三卷 虞美人草 坑夫』岩波書店、p.691
 文科大学臨床心理學科編集委員会(編)(2004)『人間科学としての臨床心理学』金剛出版、p.5

松元寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.79

宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社、p.64

논문투고일	: 2019년 03월 20일
심사개시일	: 2019년 04월 16일
1차 수정일	: 2019년 05월 06일
2차 수정일	: 2019년 05월 12일
게재확정일	: 2019년 05월 17일

 <要旨>

『坑夫』から見た生と死

- ある青年の現実逃避体験 -

矢野尊義

『坑夫』において青年は生きる喜びがないがために死を願い、死の世界に似ていると思われる地下の抗道に入ることを欲した。しかし、彼は抗道の洞窟の中で冷たい水に浸かり、死に臨むような体験をすることで現実に目覚めた。自分が生きていることを実感したからである。彼はこうしてそれまで彼の心を覆っていた虚無感から脱した。そして日常へと戻ることができた。結局、『坑夫』の冒頭に書かれた「不安」は、必ずしも抗道の体験と因果関係があるとは言えない。『坑夫』の筋が「不安」から始まったとすれば、それは「不安」とは何ら関係のない抗道の中での生死の体験やその後、抗道を出て日常に戻るという結末と矛盾するからである。したがって抗道体験への導入として設定されたこの一連の「不安」の内容は、漱石が故意に書き加えたものであり、当時の漱石の精神状態を表わしたものであったとすることができる。

Life and Death in KOUFU

- A experience of the escape of one young man -

Yano, Takayoshi

A young man wanted to die and he entered into to the dark gallery which seemed to be the another world but he was under the cold water of cavern in the gallery and he was coming to die. Then he felt actually life and recognized the reality. He felt that he lives indeed. In this way he got out of the feeling of nothingness and came to return to his normal sense.

In the end we can see that 'anxiety' which is written in the beginning in this story has no relationship with experience in the gallery. So it is contradictory in this whole story. We can say that this 'anxiety' is written intentionally by Soseki as his feeling and it describes his spiritual situation.